

平成 26 年度
出雲市文化財調査報告書

築山遺跡

上塩冶築山古墳

2015 年 3 月

出雲市教育委員会

序

出雲市上塩治町には、史跡上塩治築山古墳や史跡上塩治地蔵山古墳など大規模な古墳を筆頭に、上塩治横穴墓群、築山遺跡など数多くの埋蔵文化財が存在しております。出雲市内でも遺跡が集中する重要な地域であります。

一方、大規模な県道改良事業などの開発が進められ、そのため遺跡の調査事例も多く、開発事業と遺跡保護との調和をはかっているところもあります。

平成19年度には、史跡上塩治築山古墳の隣接地で出雲市が計画した生活環境下水路改良事業と上塩治築山古墳排水設備工事に伴ってそれぞれ埋蔵文化財発掘調査を行いました。本書はこれらの成果をまとめた報告書です。

本書が、この地域における歴史解明の一助となり、埋蔵文化財に関する理解や歴史学習などに役立てば幸いです。

最後になりましたが、本書の刊行にあたって、ご協力賜りました地元の皆様をはじめ、関係者の皆様に心からお礼申しあげます。

平成27年（2015）3月

出雲市教育委員会
教育長 横野信幸

例　言

1. 本書は、平成 19 年（2007）度に出雲市教育委員会が実施した、生活環境下水路改良事業に伴う埋蔵文化財発掘調査（以下、築山遺跡発掘調査）および上塩治築山古墳排水設備工事に伴う発掘調査（以下、上塩治築山古墳発掘調査）の成果をまとめた報告書である。
2. 発掘調査は、下記の調査地、期間で実施した。

築山遺跡発掘調査

調査地　出雲市上塩治町 290 番地ほか

調査期間　平成 19 年 4 月 3 日～4 月 23 日

上塩治築山古墳発掘調査

調査地　出雲市上塩治町 262 番地 5 ほか

調査期間　平成 19 年 10 月 29 日～10 月 31 日

3. 調査は次の体制で行った。

発掘調査（平成 19 年度）

事務局	花谷 浩（出雲市文化観光部 学芸調整官）
	石飛幸治（　同　　文化財課長）
	川上 稔（　同　　主査　）
	景山真二（　同　　係長　）
調査員	曾田辰雄（　同　　主事・上塩治築山古墳発掘調査担当）
	坂根建悦（　同　　嘱託員・築山遺跡発掘調査担当）
調査補助員	勝部真紀（　同　　臨時職員・築山遺跡発掘調査担当）
発掘作業員	上代 勇、周藤俊也、須山林吉、成相吉隆（以上、築山遺跡発掘調査）
調査指導	島根県教育庁文化財課

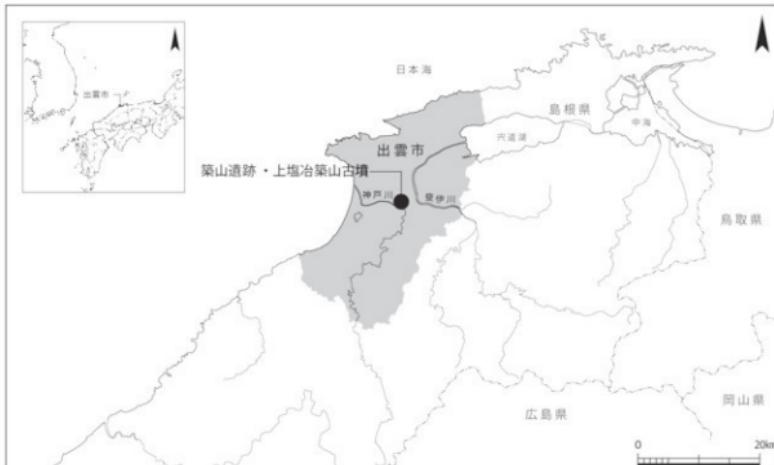
報告書作成（平成 26 年度）

事務局	花谷 浩（出雲市文化環境部 学芸調整官）
	玉木良夫（　同　　文化財課長）
調査員	穴道年弘（　同　　課長補佐兼埋蔵文化財 1 係長）
	三原一将（　同　　主任　）
	石原 聰（　同　　主任　）
	奥原このみ（　同　　主事　）
調査補助員	糸賀伸文（　同　　臨時職員）
整理作業	荒木恵理子、飯國陽子、鶴口令子、前島浩子、吹野初子、吉村香織

4. 本書の執筆は、穴道、三原、石原が行った。

5. 本書に掲載した写真は、調査員が撮影した。なお、遺物は概ね 2 分の 1 の大きさで掲載した。

6. 本書に掲載した遺物の実測図は、調査員と調査補助員が作成した。なお、掲載は、3分の1を基本としている。
 7. 本書で用いた測地系は世界測地系第Ⅲ系であり、方位は座標北を示し、レベル高は海拔高を示す。
 8. 本文中で下記のとおり遺構略号を使用している。
- S B : 挖立柱建物, S D : 溝, S K : 土坑, S P : 柱穴・ピット
9. 本遺跡の出土遺物、実測図、写真などは出雲市教育委員会で保管している。



築山遺跡と上塙冶築山古墳の位置



発掘調査区の位置

目 次

序	
例 言	
第1章 遺跡の位置と環境	1
第2章 これまでの発掘調査	4
第3章 築山遺跡の発掘調査	
第1節 調査に至る経緯	6
第2節 調査の概要	7
第3節 まとめ	12
第4章 上塙治築山古墳の発掘調査	
第1節 調査に至る経緯	13
第2節 調査の概要	13
第3節 まとめ	14
図 版	
報告書抄録	

挿図目次

第1図 築山遺跡・上塙治築山古墳（★）と出雲平野の主要遺跡（1：100,000）	2
第2図 築山遺跡・上塙治築山古墳と周辺の遺跡（1：20,000）	3
第3図 築山遺跡調査区平面図・土層断面図（1：100）	6
第4図 SD01・SK02 平面図・土層断面図（1：40）	8
第5図 SBO1（SP06～09）平面図・土層断面図（1：50）	9
第6図 SD04・SD05 平面図・土層断面図（1：40）	9
第7図 SK10・SK55 平面図・土層断面図（1：40）	9
第8図 出土遺物実測図（1：3）	11
第9図 上塙治築山古墳埴丘復元図（1：1,000）	12
第10図 墳輪片出土位置（1：800）	13
第11図 調査の状況	14

図版目次

図版 1 築山遺跡調査状況（南東から・後方に史跡上塙治築山古墳）・調査前（南から）	
図版 2 築山遺跡調査区完掘状況（北から）	
図版 3 調査区完掘状況（南から）	
図版 4 築山遺跡土層の状況（南東から）・SD05（東から）	
図版 5 築山遺跡出土遺物（1）・出土遺物（2）	
図版 6 上塙治築山古墳出土円筒埴輪片	

第1章 遺跡の位置と環境

出雲平野は、中国山地と島根半島の間に広がる平野で、中国山地から流れ出る神戸川と斐伊川の沖積作用によって形成された。

上塩治築山古墳は築山遺跡内にあり、築山遺跡は出雲平野の南側、中国山地から派生する丘陵際にあり、神戸川右岸の微高地に位置する。この微高地は、南側の丘陵裾から北に広がる平野に向かって緩やかに低くなっている。また、微高地上の築山遺跡の北側には、角田遺跡と宮松遺跡も存在する。

これまでの発掘調査において、築山遺跡からは、縄文時代後期から弥生時代前期までの土器や石器が出土している。同時期の築山遺跡周辺の遺跡としては、三田谷I遺跡（38）があげられる。この遺跡は築山遺跡の南側丘陵を越えたところにあり、直線距離では約1km離れている。ここからは縄文時代後期の丸木舟が見つかっており、周辺に水域が広がっていた当時の自然環境がうかがえる。

また、弥生時代中期から古墳時代中期の遺物がほとんど出土していない。この時期、築山遺跡は人々との関わりが少なかった土地であったことが分かる。

そして、弥生時代中期から後期にかけては、このころ平野中央に存在した入海の周辺に、天神遺跡（43）、古志本郷遺跡（45）、下古志遺跡（48）といった大規模な集落遺跡が次々と営まれるようになるが、古墳時代前期には廃絶したり、規模が縮小したりしているようである。このような現象は、出雲平野の広範囲で認められることから、古墳時代前期に何らかの社会的に大きな事象が起ったことが想起され、出雲平野の遺跡の消長においての画期となっている。

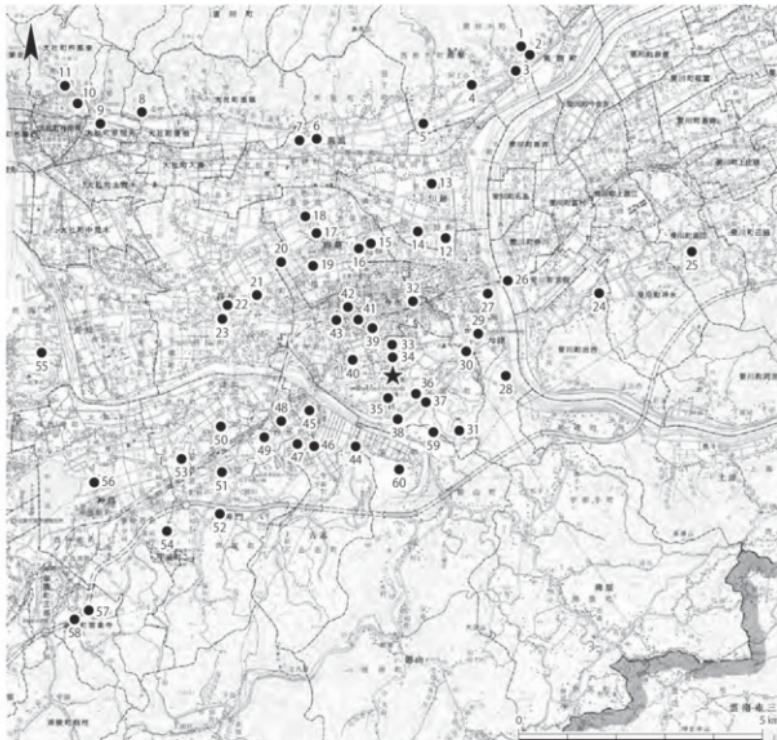
古墳時代後期になると、築山遺跡内や周辺には上塩治築山古墳と上塩治横穴墓群（37）などが造られる。從来、上塩治築山古墳は単獨で築造されたと考えられてきたが、平成18・19年（2006・2007）度の発掘調査で周辺から7基の古墳が見つかった。このことから、本来は、大きな首長墓の周りを中小の古墳が取り巻く形態の古墳群であったことが明らかとなった。さらに、上塩治横穴墓群の第34支群も、ほぼ同時期にこの古墳群の後背にあたる丘陵に築かれ始める。このような首長墓、古墳群、横穴墓群の在り方は、当時の社会構成を如実に物語る非常に注目される事例である。

奈良時代の様子は8世紀に編纂された『出雲國風土記』でうかがい知ることができる。これによれば、築山遺跡は神門郡の日置郷にあたる場所と推定される。これまでの築山遺跡の発掘調査では、「佛」と書かれた墨書き土器や、鉄鉢形土器などが出土しており、さらに、8世紀頃の須恵器蓋杯に火葬骨を入れて埋葬している土坑墓が見つかっていることなどから、周辺に宗教施設や役所などの公的な施設が存在した可能性がある。なお、調査地の西約850mの場所には、神門郡の朝山郷の新造院に推定される神門寺境内庵寺（40）がある。

中世の遺構としては、これまでの築山遺跡の調査では、掘立柱建物跡や方形の区画溝が見つかっている。出雲平野の中世の建物跡は、蔵小路西遺跡（16）、天神遺跡（43）、渡橋沖遺跡（19）などで見つかっている。また、築山遺跡で出土した主な遺物としては、大量の輸入陶磁器があげられる。出雲平野において、輸入陶磁器の出土量は鰐淵寺、蔵小路西遺跡に次ぐ量であり注目される。また、塩

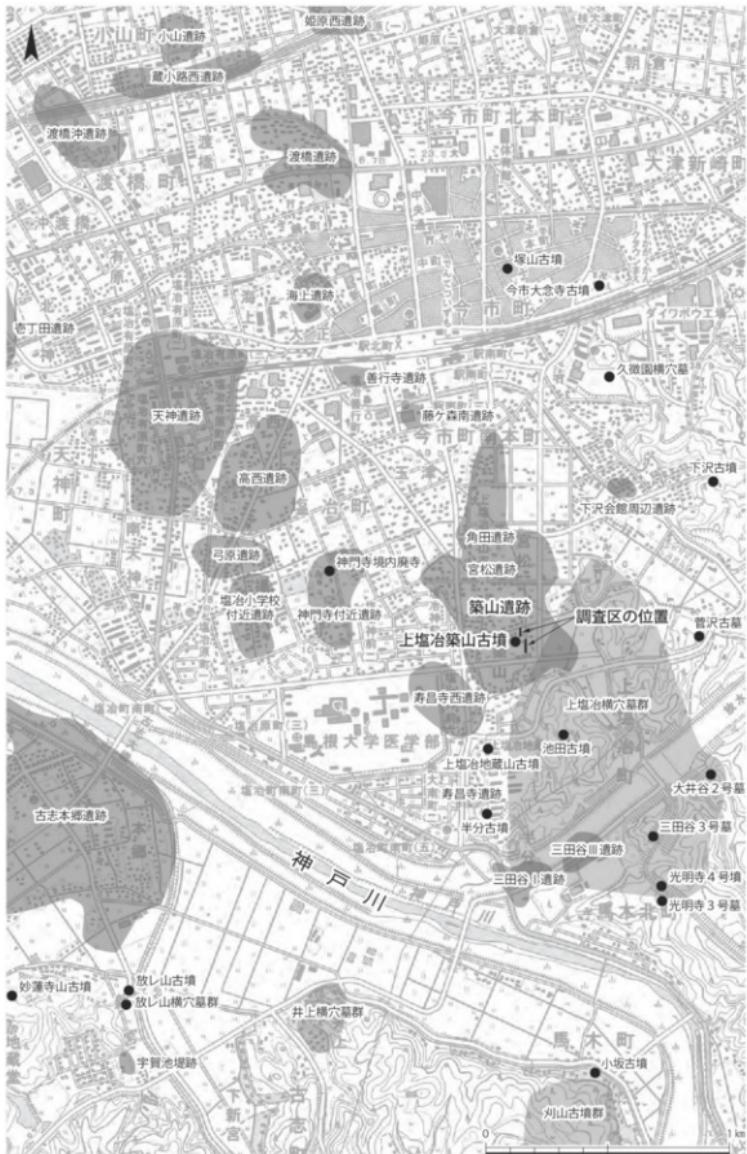
治判官館跡に推定されていた場所も平成18・19年（2006・2007）度に発掘調査を行ったが、堀など館の存在を証明する遺構は見つからなかった。

以上のように、上塩治築山古墳や築山遺跡ではこれまでに重要な遺構や遺物が発見されており、出雲の歴史を解明するうえで、重要な地域として注目されている。



1. 大寺古墳
2. 大寺三藏遺跡
3. 青木遺跡
4. 門前遺跡
5. 山持遺跡
6. 里方八方原遺跡
7. 高浜II遺跡
8. 莢根遺跡
9. 原山遺跡
10. 五反配遺跡
11. 出雲大社境内遺跡
12. 中野清水遺跡
13. 萩野古墓
14. 中野美保遺跡
15. 姫原西遺跡
16. 龍小路西遺跡
17. 小山遺跡
18. 矢野遺跡
19. 渡橋沖遺跡
20. 白枝荒神遺跡
21. 志丁田遺跡
22. 白枝本郷遺跡
23. 余小路遺跡
24. 後谷遺跡
25. 三井II遺跡
26. 斐伊川橋樋遺跡
27. 石土寺遺跡
28. 権現山古墳
29. 西谷埴墓群
30. 長者原麻塚
31. 大井谷II遺跡
32. 今市大念寺古墳
33. 角田遺跡
34. 宮松遺跡
35. 池田古墳
36. 上塩治地蔵山古墳
37. 上塩治横穴墓群
38. 三田谷I遺跡
39. 藤ヶ森南遺跡
40. 神門寺境内廐寺
41. 善行寺遺跡
42. 海上遺跡
43. 天神遺跡
44. 井上横穴墓群
45. 古志本郷遺跡
46. 放レ山古墳
47. 紗蓮寺山古墳
48. 下古志遺跡
49. 宝塚古墳
50. 多聞院遺跡
51. 浅柄遺跡
52. 保知石遺跡
53. 神門横穴墓群
54. 北光寺古墳
55. 上長浜貝塚
56. 山地古墳
57. 三部竹崎遺跡
58. 領田遺跡
59. 光明寺3号墓
60. 刈山古墳群

第1図 築山遺跡・上塩治築山古墳（★）と出雲平野の主要遺跡（1：100,000）



第2図 築山遺跡・上塙治築山古墳と周辺の遺跡 (1:20,000)

第2章 これまでの発掘調査

史跡上塩治築山古墳（以下、築山古墳）は出雲を代表する古墳であり、昭和60年（1985）度、平成12・13年（2000・2001）度に範囲確認や墳形確認を目的としたトレンチ調査が行われている。

築山遺跡も昭和60年度にトレンチ調査が行われ、平成12年（2000）度には遺跡内の塩治判官館跡と呼ばれていた箇所でトレンチ調査が行われた。これらの調査は国庫補助事業で行われたが、以後は開発に伴う発掘調査が行われることとなる。平成14年（2002）度には、出雲市築山土地区画整理事業に伴う発掘調査が実施され、平成15～19年（2003～2007）度までは、県道出雲三刀屋線改良事業および県道今市古志線改良事業に伴う大規模な発掘調査が行われた。これらの調査主体はいずれも出雲市教育委員会であり、以下、調査の概要について簡単に振り返ってみたい。

昭和60年度発掘調査

昭和60年（1985）度には塩治地区遺跡分布調査の一環として、国庫補助を受けて発掘調査が行われた（川上1986）。この発掘調査は、築山古墳の墓域および築山遺跡の範囲確認を目的として実施された。計5つのトレンチが設定され、2つが築山遺跡の墓域確認のため、3つが築山遺跡の範囲確認のために設けられている。調査の結果、いずれのトレンチからも遺構と遺物が出土し、築山古墳から南西100mに及ぶ範囲にまで築山遺跡が広がることが分かった。

平成12・13年度発掘調査

平成12・13年（2000・2001）度には、国庫および県費補助事業としてトレンチ調査が行われた。この発掘調査は、当時の島根県出雲土木建築事務所が計画する出雲三刀屋線改良事業の計画予定地周辺に築山古墳、築山遺跡など重要な遺跡が存在したため、島根県教育委員会の指示により遺跡の状態把握を目的に実施された。

調査の結果、築山古墳周辺の調査では、円筒埴輪や須恵器子持壺などが出土し、墳形が直径46mの円墳と推定された（藤永2006）。また、築山遺跡内では塩治判官館跡と呼称されていた箇所にトレンチが設定されたが、関連する遺構や遺物が見つからず館跡がある可能性が低くなる結果となった（三原2003）。

平成14年度発掘調査

平成14年（2002）度には出雲市築山土地区画整理事業に伴う埋蔵文化財発掘調査が行われた。調査の結果、多数の溝、土坑、小ピットなどの遺構のほか、縄文時代から近世にかけての遺物が出土した（藤永2004）。特筆すべき遺物として、塩治氏の家紋入漆碗があげられる。調査地付近は鎌倉時代に出雲守護である塩治氏が館を構えたのではないかと考えられている場所の一つである。付近に塩治氏に縁がある塩治神社、高貞社などが存在することからの仮説であるが、この漆碗が出土したことは、今後の研究において看過できない資料となろう。

平成15年度発掘調査

平成15年（2003）度には、県道出雲三刀屋線改良事業および県道今市古志線改良事業に伴う発掘

調査が実施された。前者の発掘調査では、まとまった量の縄文時代後期から弥生時代前期にかけての土器や石器が出土し、注目を集めた（三原・米田 2005）。後者の調査では、奈良時代の火葬墓が見つかった。素掘りの土坑に、火葬された人骨を納めた須恵器の蓋環が据え置かれていた（三原 2007）。この地に仏教が浸透していることを示すもので、貴重な発見といえよう。

平成 16～18 年度発掘調査

平成 16～18 年（2004～2006）度にかけては、築山古墳から約 70m 東で、南北方向 430m に及ぶ県道今市古志線改良事業に伴う発掘調査が実施された。

この調査では、中世の方形区画溝や建物跡、井戸跡が発見されたほか、「牛頭天王」などと墨書きされた呪符木簡、輸入陶磁器ほか多量の土器・陶磁器が出土した（原 2009）。これらの成果は、中世の出雲平野の歴史を紐解く貴重な資料となっている。

平成 17 年度発掘調査

平成 17 年（2005）度には、築山古墳の北側で 2 つのトレンチが設定されて発掘調査が行われた。調査の結果、周壕外縁部が見つかったほか、本来の墳頂の端部付近が確認された。これにより、築山古墳の墳形が前方後円墳である可能性がほぼ否定され、規模が直径 46m の円墳で、周壕外縁の直径が約 77m であると推定された（藤永 2006）。

平成 18・19 年度発掘調査

平成 18・19 年（2006・2007）度には、築山古墳から約 40m 南で、東西方向 300m に及ぶ県道今市古志線改良事業に伴う発掘調査が実施された。

この調査では 5 基の円墳が発見された。これまで築山古墳は単独で築かれたと考えられていたが、この発見をきっかけに、築山古墳の周りを中小の古墳が取り巻く「築山古墳群」が形成されていることが明らかとなった（原・高橋 2009）。当時の社会構造を如実に示す貴重な成果である。

このほか、調査地の西端付近で出土した弥生時代前期の人面付土器は、新聞などでも取り上げられ、多くの人々の関心を引いた。

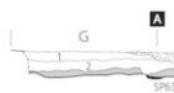
参考文献

- 川上 稔 1986『塩治地区遺跡分布調査』I, 出雲市教育委員会
原 俊二 2009『築山遺跡』III, 出雲市教育委員会
原 俊二・高橋誠二 2009『築山遺跡』IV, 出雲市教育委員会
藤永照隆 2004「第 4 章 築山遺跡の調査」『寿昌寺遺跡・築山遺跡発掘調査報告書』出雲市教育委員会
藤永照隆 2006「上塩治築山古墳埴丘の調査」『出雲市埋蔵文化財発掘調査報告書』第 16 集, 出雲市教育委員会
三原一将 2003『塩治宮館跡』出雲市教育委員会
三原一将・高橋智也 2004『上塩治築山古墳』出雲市教育委員会
三原一将・米田美江子 2005『築山遺跡』I, 出雲市教育委員会
三原一将ほか 2007『築山遺跡』II, 出雲市教育委員会

第3章 築山遺跡の発掘調査

第1節 調査に至る経緯

出雲市（建設事業部道路河川維持課）は、平成19年（2007）度に生活環境下水路改良事業を計画した。計画地の一部が周知の遺跡である築山遺跡の範囲内であったため、市教育委員会は文化財保護法に基づき、発掘調査を実施することとなった。工事の内容は、築山古墳の墳裾から東へ27m離れた場所に、南北40m、幅2mの現道を道路用側溝を併設した全幅4mの道路に拡幅するものであった。調査は、平成19年に市文化観光部文化財課が行い、この調査の成果を平成26年（2014）度に整理し、報告書としてまとめたものが本章である。

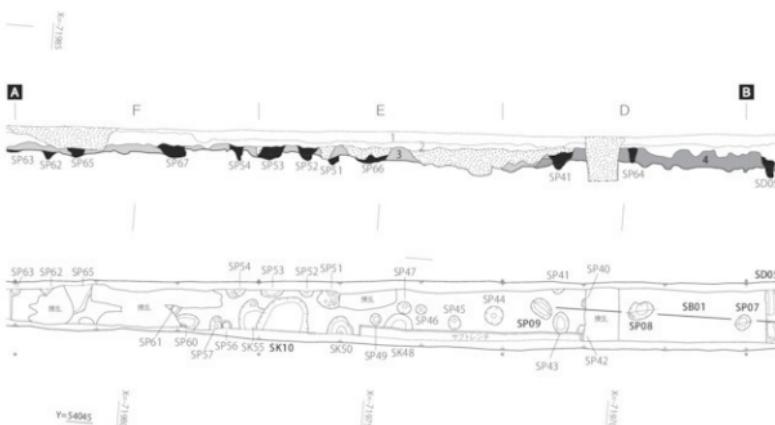


凡 例

- 第3図の平面図・土層断面図は、紙幅の都合上3つに分割した。
それぞれ、▲ライン、■ラインが重なり合う。

- 堆積土層の層名は、下記のとおりである。

1層：暗褐色土（表土）
2層：褐色土（旧耕作土）
3層：灰褐色土
4層：黒褐色土
5層：黒色土（SD03の覆土、軽石疊混在）
■ 滑模埋土
■■ 損壊



第2節 調査の概要

調査区全体に畑の耕作土である暗褐色土（1層）と褐色土（2層）が堆積する。耕作土の下には、AグリッドからBグリッドまでは地山上に黒色土（5層）が堆積し、これは後述する溝SD04の覆土と考えられる。CグリッドからDグリッド中ほどまでは地山上に、黒褐色土（4層）が堆積し、覆土から奈良～平安時代の須恵器や製塙土器が出土した。Dグリッド中ほどから南側は、基本的に地山上に灰褐色土（3層）が堆積するが、後世の攪乱を多数受けている状況である。なお、地山は、調査区の南から北へ向かって徐々に低くなる。

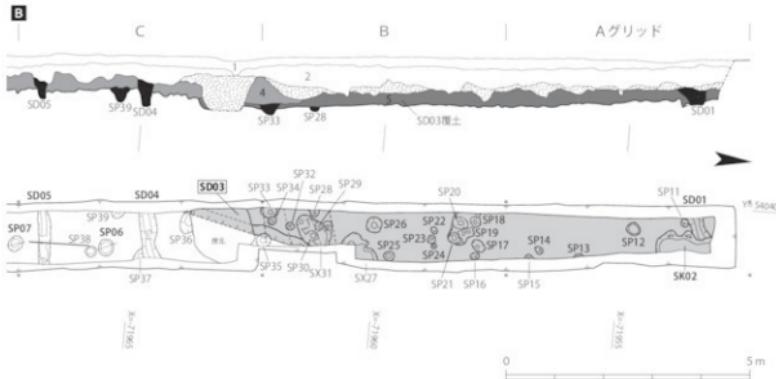
第3節 検出遺構（第3～7図）

遺構検出を地山直上で行なったところ、溝、土坑、ピット群などを検出した。ここでは、主な遺構を取り上げる。

溝SD01は、調査区の北端Aグリッドで検出された。北東から南西方向に延び、検出した溝の長さ0.5m以上、上幅0.3m、深さ0.35mである。重複関係から後述する土坑SK02より古く、溝SD03より新しいと考えられる。溝内から弥生時代前期の無頸壺口縁部（第8図1）が出土したが、後世の流入と思われる。

溝SD03は、BグリッドからCグリッドにかけて北北東方向に検出された。検出した溝の肩部は、45°の傾斜で溝底部に至る。その溝底部は調査区の北端まで続く。溝の長さ10m以上、深さ0.3mである。覆土には軽石碎を含み締まりのある黒色土が堆積するが、埴輪などの出土遺物はなかった。この溝は、築山古墳に関わる壕の可能性があるので、詳細については最後に触れる。

溝SD04は、Cグリッドの中ほどで、ほぼ東西方向に検出された。検出した溝の長さ1.1m以上、



第3図 築山遺跡調査区平面図・土層断面図（1:100）

上幅 0.25 m、深さ 0.45 m である。溝内から 12 世紀後半～13 世紀代の土師器の底部（第8図8）が出土した。

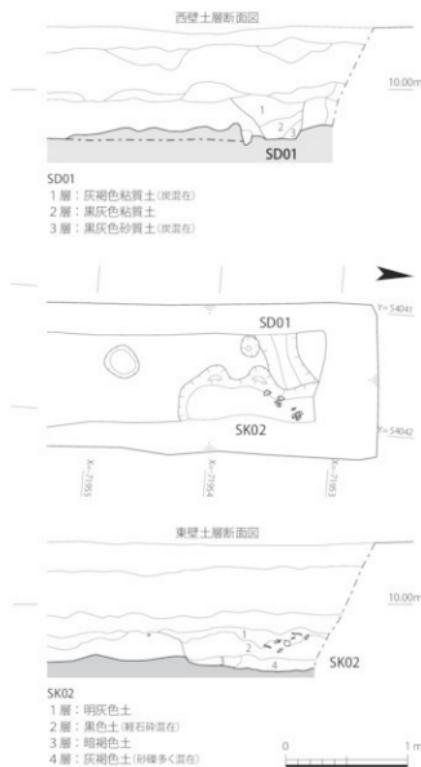
溝 SD05 は、溝 SD04 の南 2 m、ほぼ並行して検出された。検出した溝の長さ 0.9 m 以上、上幅 0.3 m、深さ 0.55 m である。溝内から 12 世紀後半～13 世紀前半の柱状高台付の土師器（第8図9）が出土した。

土坑 SK02 は、調査区の北端 A グリッドで検出された。検出した土坑の南北長 1.1 m 以上、東西幅 0.35 m 以上、深さ 0.35 m である。この土坑は、溝 SD03 の覆土を掘り込み、また重複関係から溝 SD01 より新しいとみられる。覆土の一部（明灰色土と黒色土）から 16 世紀後半以降の土師器（第8図7）が出土した。

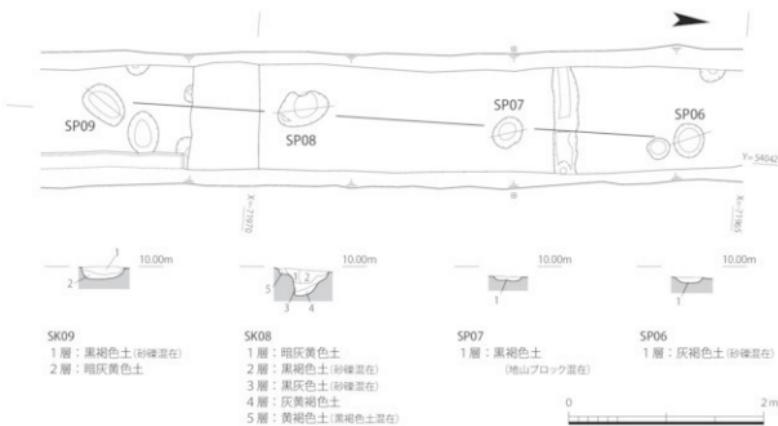
土坑 SK10 は、E グリッドの中ほどで検出された。円形状を呈し、東側は調査区外である。南北長 1 m、東西幅 0.7 m 以上、深さ 0.3 m である。覆土から 8 世紀後半頃の須恵器の杯口縁部（第8図2・3）が 2 点出土した。

ピット群は、全部で 53 穴が検出された。その中で、C グリッドから D グリッドにかけて検出された柱穴 SP06・SP07・SP08・SP09 の 4 穴が掘立柱建物 SB01 の南北列になる可能性がある。主軸は、N-3°-E で、一直線上に並ぶが、東西どちらに展開するかは不明である。柱間距離は、柱穴 SP06・SP07 と柱穴 SP07・SP08 間が各 2.1 m、柱穴 SP08・SP09 間が 1.9 m を測る。柱穴の径 14～25cm、深さ 2～13cm と残存状況は悪く、最底部のみの検出である。柱穴 SP08 内から 7 世紀末～8 世紀初めの須恵器や 8 世紀～9 世紀初めの製塙土器が出土した。掘立柱建物 SB01 とほぼ直交する中世の溝 SD05 に先行すると考えられる。

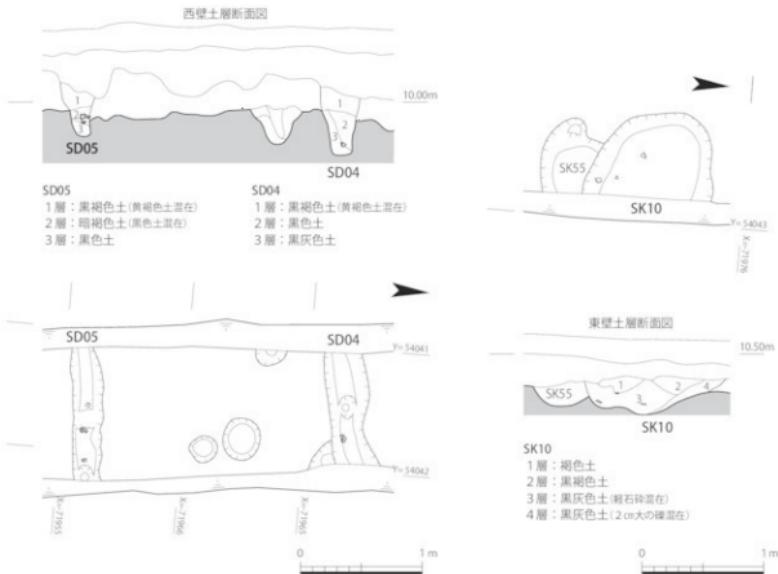
以上のように、本調査区では古代の溝（SD03）1 条、土坑（SK10）1 基、古代～中世の溝（SD01）1 条、中世の溝（SD04・SD05）2 条、土坑（SK02）1 基、その他、古代の掘立柱建物の可能性があるピット列を確認した。



第4図 SD01・SK02 平面図・土層断面図（1:40）



第5図 SB01 (SP06 ~ 09) 平面図・土層断面図 (1:50)



第6図 SD04・05 平面図・土層断面図 (1:40)



第7図 SK10・SK55 平面図・土層断面図 (1:40)

第4節 出土遺物（第8図）

出土遺物については、弥生土器、須恵器、土師器、製塙土器、陶磁器、鉄製品など、全部で240点が出土した。Cグリッド～Eグリッド間で全体の約76%を占める。このうち、図化した遺物は、遺構内から10点、それ以外は包含層（主に黒褐色土）からの出土である。

遺構内出土遺物（第8図1～10）

遺構内からは、弥生土器1点、須恵器3点、土師器52点、製塙土器1点が出土した。遺構ごとに記述する。

SD01 弥生土器の無頸壺（第8図1）かと思われる破片1点が出土した。内湾する口縁部の近くに径6mmの孔が1箇所認められる。蓋を付けて使用した孔かと思われる。弥生時代前期である。

SD04 土師器の皿底部（8）1点と土師器小片7点が出土した。8の底部径は3.3cmを測り、回転糸切り痕がみられる。12世紀後半から13世紀代である。

SD05 土師器の柱状高台付（9）1点と土師器小片35点が出土した。9の受部の大半が欠損し、杯か皿かは不明である。脚部は「ハ」字状に開き、底部は回転糸切り痕がみられる。12世紀後半から13世紀前半である。

SK02 土師器の杯（5・7）2点と土師器小片4点が出土した。5は口縁部で、逆「ハ」の字状に開く。時期は不明である。7は低い器高で、底部に回転糸切痕がみられる。16世紀後半頃と思われる。

SK10 須恵器の杯の口縁部（2・3）2点が出土した。口縁端部が先細るもの（2）とやや肥厚して丸くおさまるもの（3）がある。これらは8世紀後半頃と思われる。

SP06 須恵器の長頸壺（4）と製塙土器（10）各1点と土師器小片1点が出土した。4は長頸壺の頸部から肩部にかけての一部である。7世紀末葉から8世紀初めと思われる。10は体部下半を欠くが、砲弾状を呈すると思われる。薄い作りで、内外面に指頭圧痕がみられる。8世紀から9世紀初めである。

SP09 土師器の杯口縁部（6）1点が出土した。端部近くで若干外反する形状である。内面に朱がみられる。時期は不明である。

なお、SP57（Fグリッド）から土師器2点、SP37（Cグリッド）から土師器1点、SP35（Cグリッド）から土師器1点、SP41（Dグリッド）から須恵器1点が出土したが、いずれも小片のため図示できなかった。

遺構外出土遺物（第8図11～19）

包含層等から多数の遺物が出土したが、図化した須恵器4点、製塙土器2点、備前焼1点、土製品1点、鉄製品1点を記述する。

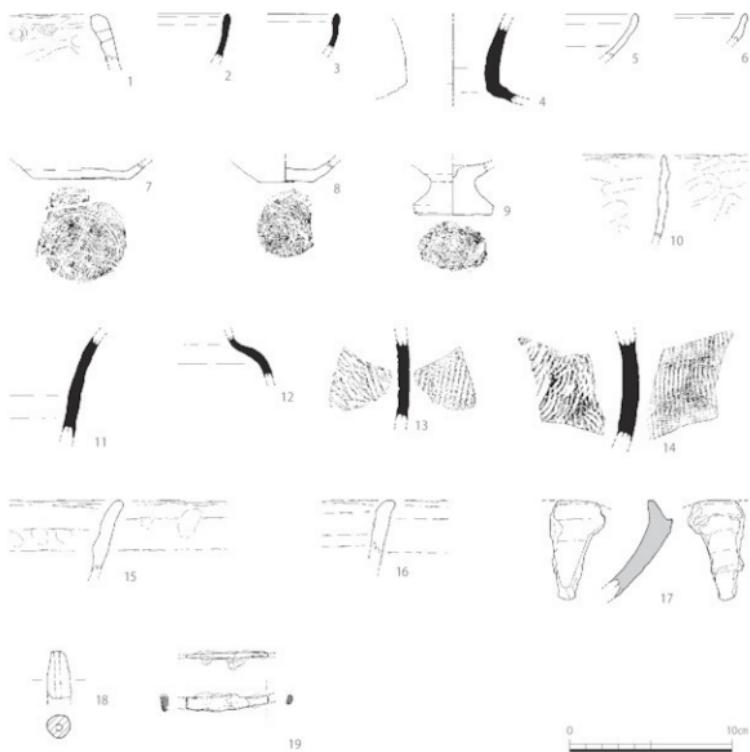
黒褐色土（4層）から出土した遺物には、須恵器（11～13）3点、製塙土器（15・16）2点、鉄製品（19）1点、また、灰褐色土（3層）からは、備前焼（17）1点が出土した。

11は長頸壺の頸部（Cグリッド）、12は直口か短頸壺の肩部（Eグリッド）、13は腰部部片（Cグリッド）である。15は製塙土器（Dグリッド）の口縁部で、内外面に指頭圧痕が明瞭である。16も製塙土器（E

グリッド)の口縁部で、内面に指頭圧痕がみられる。8世紀から9世紀初めである。19は刀子(Eグリッド)で、切先と茎部先端が欠損し、残存長5cmを測る。17は備前焼の擂鉢口縁部(Bグリッド)である。体部から内湾して立ち上がり、口縁端部は上方へ扯張される。15世紀前半である。

耕作土中から須恵器(14)1点、排土土中から土鍾(18)1点が出土した。

14は須恵器の甕(Gグリッド)である。18は約半分が欠損するが、管状土鍾で紡錘形を呈する。残存長2.9cm、残存最大径1.5cmを測る。孔径は3.5～4mmである。網漁の鍾として使用したものである。8世紀代である。



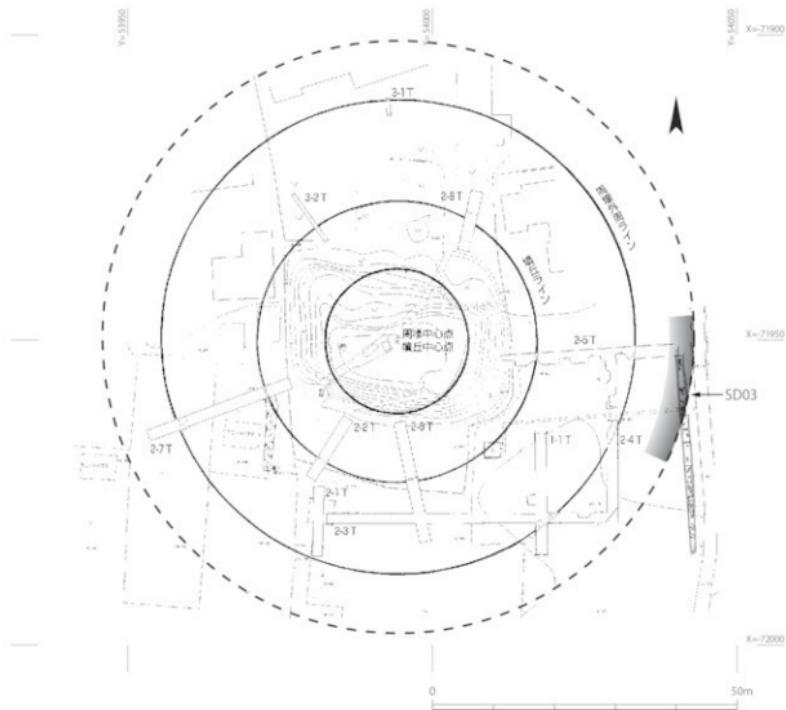
第8図 出土遺物実測図 (1:3)

第3節 まとめ

検出した遺構のなかで注目されるのは、築山古墳の周壕の可能性がある溝 SD03が確認されたことである。検出された溝の肩部は、北北東方向に延び、若干弧を描く形状である。

築山古墳はこれまでの調査で、周壕外周が墳裾から約15m外側に位置することが想定されている。今回確認された溝SD03の東肩は、墳裾から約25mの距離にあたり、周壕よりもひと回り外側を巡ることとなる。古墳の周囲にもう一つ周壕が巡っていた可能性がでてきた。古墳の規模は、墳丘径約46m、周壕径約77mであるとされており、今回の溝が二重周壕の外側の溝肩とすると、その規模は約98mを測ることになる（藤永2006）。

このような二重周壕の例は、同じ築山遺跡内の築山4号墳でも確認されている（原・高橋2009）。しかし、検出した遺構はごく一部でしかないため、これだけで断定することはできない。今後、築山古墳の調査例の増加を待って改めて検討すべきである。



第9図 上塙治築山古墳墳丘復元図（藤永2006を一部追加・改変）(800)

第4章 上塩治築山古墳の発掘調査

第1節 調査に至る経緯

上塩治築山古墳（以下、築山古墳）の周りには排水設備がないため、墳丘東側では雨水が隣接地へ流れ出る状況であった。この問題を解決するため、出雲市（文化観光部文化財課）は、平成19年（2007）度に排水設備工事を計画した。この工事は、築山古墳の東側に延長58mにわたって幅30cmのU字溝を埋設するものであった。築山古墳の見かけの墳裾際および墳丘周囲での施工となるため、工事対象部分の約20mについて、平成19年10月29日から31日まで発掘調査を行った。この調査の成果を、平成26年（2014）度に整理し、報告書としてまとめたものが本章である。

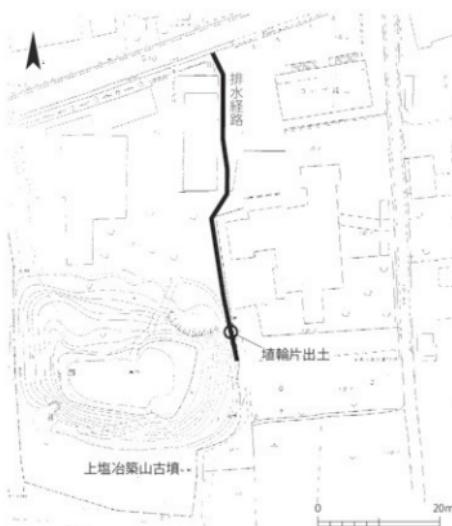
なお、築山古墳は墳丘の中心部分だけが国の史跡として指定されており、墓域全体が指定されているわけではない。今回の発掘調査は史跡の指定地外で行った。

第2節 土層の状況と出土遺物

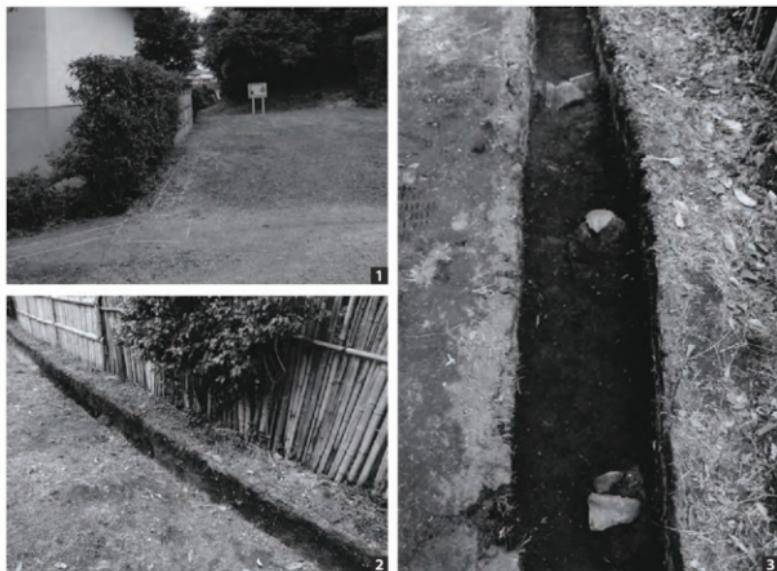
今回の調査対象である地表以下30cmまでは、攢乱土のみが堆積していた。この深さでは墳裾や周壕などの発見には至らなかった。

遺物については、円筒埴輪片15点、唐津焼や土鍋と見られる陶磁器片3点が出土している。円筒埴輪が出土した場所は墳丘残存部の北東側で、

見かけの墳裾から約2m、深さ20cmの地点である。円筒埴輪については、部位の分かる破片を図版6に掲載した。1が口縁部、2～6がタガ部、7が胴部、8・9が基底部の破片である。以下、平成12・13年（2000・2001）度の築山古墳発掘調査で出土した円筒埴輪の形態的特徴（高橋2004）に基づき、形態の分類を示しておく。色調はいずれも明橙色である。1は口縁端部が凹み（1類）、外方へ若干引き出すもの（a）である。2・3・5はタガの端部がフラット（2類）で真横に出るもの（c）である。4・6はタガが剥落しており形態不明。9は基底端部の断面を丸くおさめるもの（2類）であるが、8は端部欠損につき形態不明である。



第10図 墓輪片出土位置（1:800）



① 調査前（北から）② 調査状況（南西から）③ 遺物出土状況（南から）

第11図 調査の状況

第3節　まとめ

今回の発掘調査は、現存する墳丘の墳裾際での調査となった。墳丘形態を理解する上で数少ない調査の機会ではあったが、調査対象の深度が攪乱土層より下へ到達しなかったため、墳丘・周壕等など築山古墳に関係する遺構の情報を得ることはできなかった。

しかしながら、地表下30cmまでは攪乱土が堆積しており、この層に現代遺物に混ざって円筒埴輪片が含まれていることが分かった。このことは、築山古墳の墳丘が後世に大きく崩され、周りの土地の造成に利用されたことを示唆する貴重な成果である。

参考文献

高橋智也 2004 「上塩治築山古墳の円筒埴輪について」『上塩治築山古墳』出雲市教育委員会

図 版



築山遺跡調査の状況（南東から・後方に史跡上塙治築山古墳）



調査前（南から）



築山遺跡調査区完掘状況（北から）



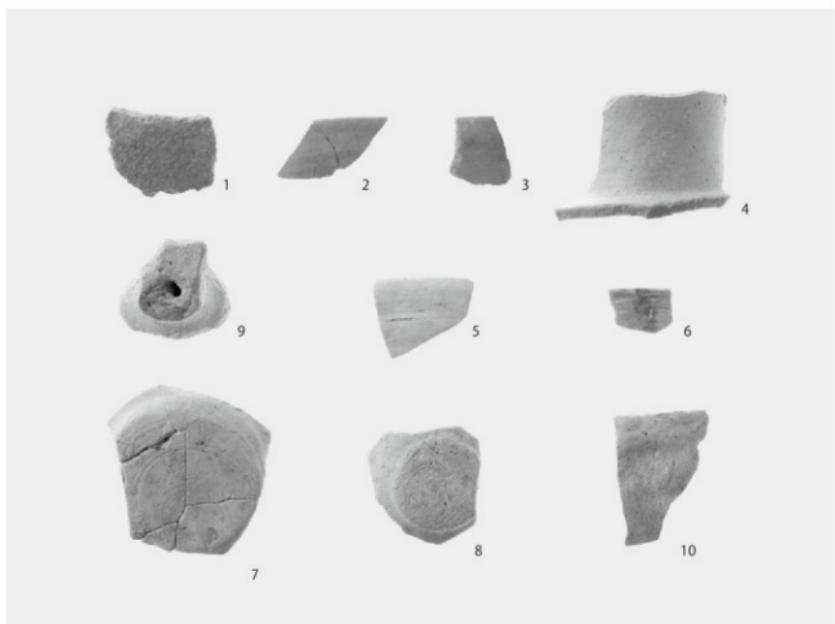
調査区完掘状況（南から）



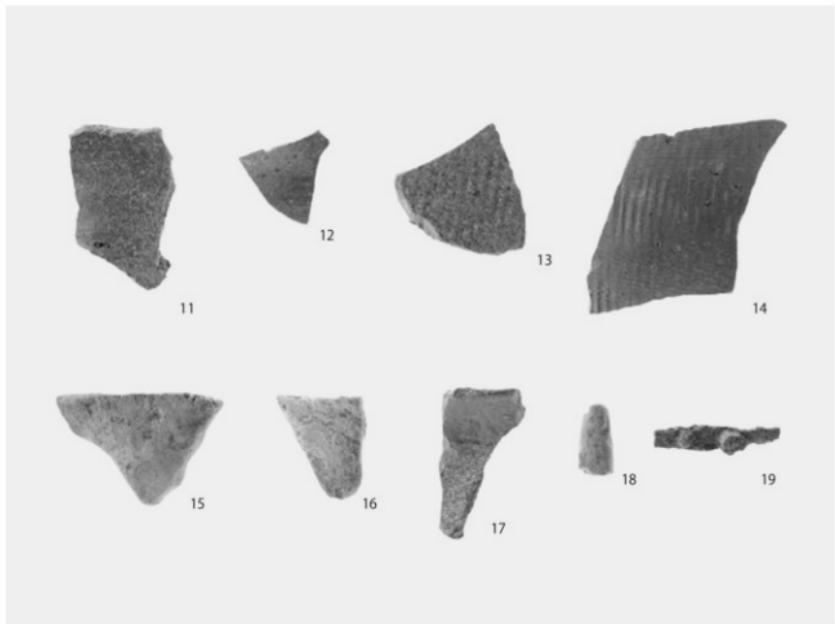
築山遺跡土層の状況（南東から）



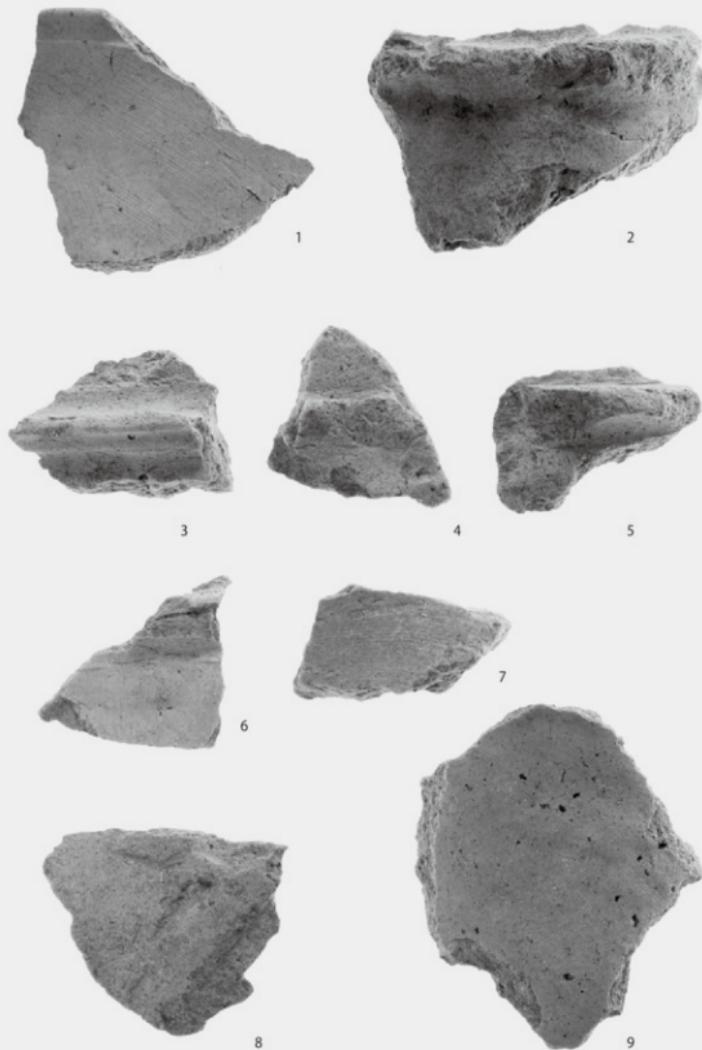
SD05（東から）



築山遺跡出土遺物（1）



出土遺物（2）



上塙冶築山古墳出土円筒埴輪片

報 告 書 抄 錄

本書で使用した用紙

表 紙	上質紙	135kg
見返し	上質紙	110kg
本 文	マットコート紙	90kg
写真図版	アート紙	90kg

平成 27 年（2015）3 月 27 日 発行

出雲市の文化財報告 27

平成 26 年度 出雲市文化財調査報告書

築山遺跡

上塩冶築山古墳

〒693-8530 島根県出雲市今市町 70 番地

著作権所有

発 行 者 出雲市教育委員会

印 刷 者 株式会社 報光社